

第1章

亀岡市の概要

第1節 社会的状況

1 位置と地勢

本市は、京都市の西方約20km、京都府のほぼ中央に位置し、北は南丹市、東は京都市、南と西は大阪府に接しており、兵庫県とも近い距離にあります。京都府の中心である京都市とは、地形的に分断されているものの、京都駅から園部駅間の複線化事業が完成したJR山陰本線や京都縦貫自動車道の整備によって、大都市圏の近郊都市としての機能を強めています。

一方で本市は、丹波地域の産業・文化の中心地として発展してきており、この地域の玄関口・中心地として、独自の都市圏を形成する自立性も併せ持っています。

また、本市は、周囲を500～800mクラスの山々に囲まれた盆地状の地形にあり、市域の約7割が山林となっているほか、市域の中心部を北から東へ貫流する大堰川をはじめ、中小河川が市域を覆うように流れています。



	東西	南北	面積
広ぼう	24.6 km	20.5 km	22,480 ha

図2 位置図・地勢（出典：亀岡市統計書）

2 人口・世帯

（1）人口・世帯

本市の人口は、平成12年（2000）まで増加傾向となっていますが、平成12年（2000）をピークに緩やかな減少傾向となっており、令和2年度（2020年度）の総人口は87,937人となっています。令和7年度（2025年度）は81,955人、令和12年度（2030年度）には77,237人、令和27年度（2045年度）に60,960人と、今後も減少傾向となることが予想されています。

一方で、世帯数は増加傾向となっていることから、核家族世帯や単独世帯の増加などが考えられます。

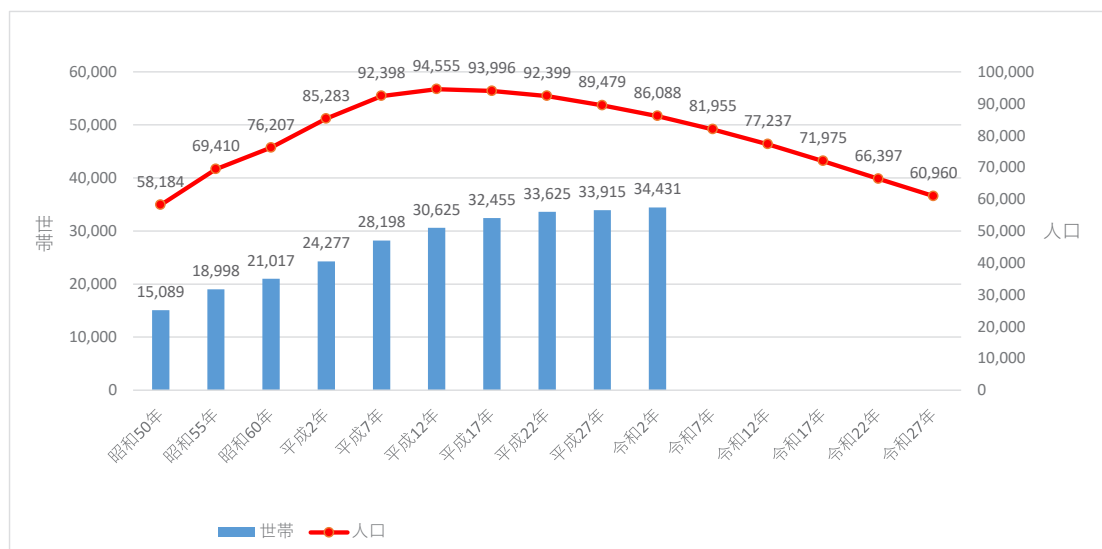
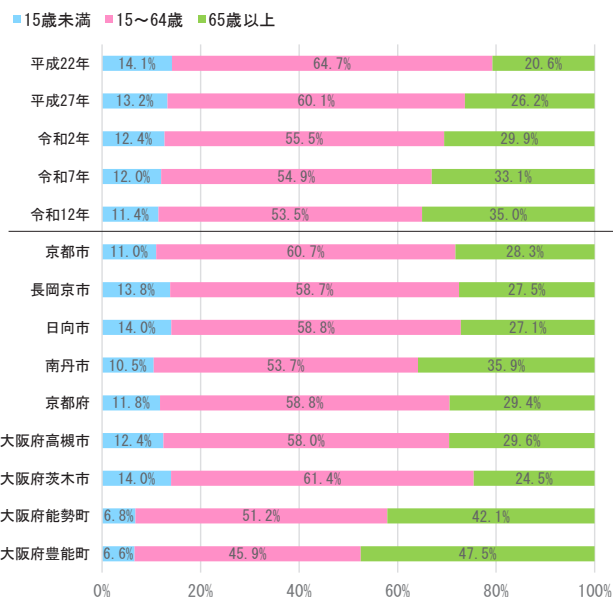


図3 人口及び世帯数の推移（出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年度推計）」）

（2）年齢3区分別人口

年齢3区分別人口割合の推移をみると、15歳未満の年少人口と15～64歳の生産年齢人口が減少傾向、65歳以上の高齢者人口が増加傾向となっており、少子高齢化が進んでいます。

一方で、周辺の市町と比較すると、亀岡市の年齢3区分別での人口の割合は、京都府南丹市、大阪府高槻市など隣接した市町と類似した傾向を示しています。



※亀岡市以外の数値は令和2年の調査結果
図4 年齢3区分別人口の推移（出典：国勢調査）

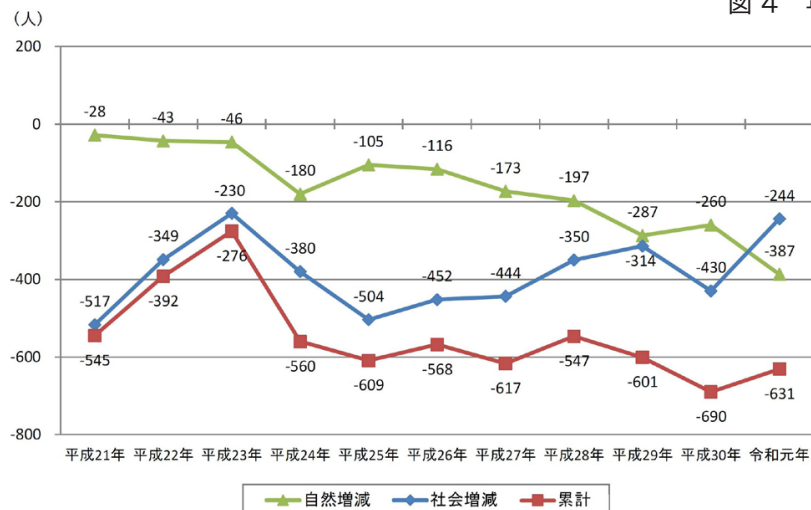
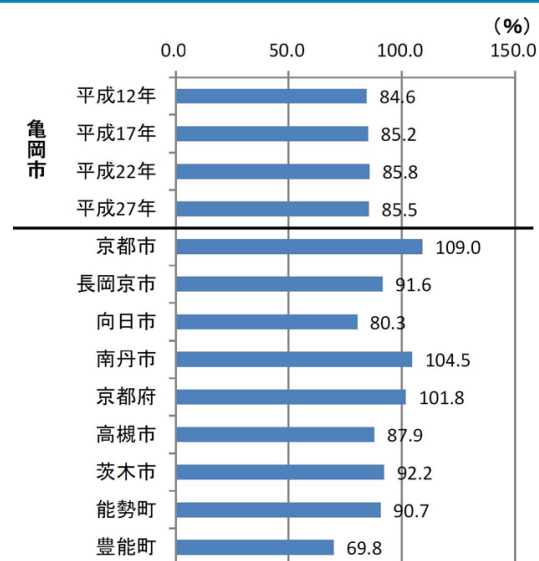


図5 人口動態の推移（出典：亀岡市統計書）

(3) 昼夜間人口比率

昼夜間人口比率をみると、夜間人口と比較して昼間人口が少なく、85%前後で推移しており、周辺市町と比べて、比較的低い値となっています。

昼夜間人口比率から、大都市のベッドタウンとなっていることが分かります。



※ 亀岡市以外の数値は平成27年の調査結果

図6 昼夜間人口比率の推移（出典：国勢調査）

3 産業

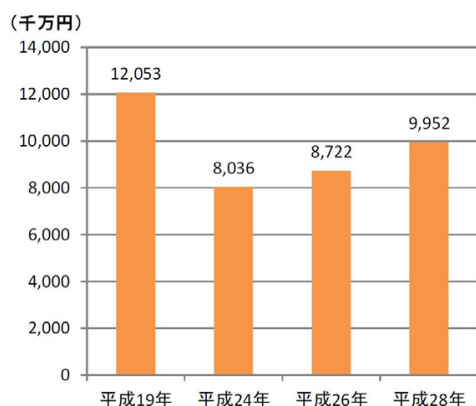
(1) 商業

商業の推移をみると、卸小売業年間商品販売額は平成19年（2007）から平成24年（2012）までの間に約400億円減少していますが、平成24年（2012）以降は、増加傾向にあります。

中心性指数※の状況をみると、京都市を除く近隣市と比べて、消費者の吸収力が高くなっています。

※ 中心性指数：京都府を1とした場合の顧客吸収力の指数、1より大きければ消費者の流入が大きく、1より小さければ消費者の流出が大きい

$$\text{中心性指数} = \frac{\text{市内・町内小売業年間商品販売額} / \text{市内・町内人口}}{\text{府内小売業年間商品販売額} / \text{府内人口}}$$



※ 物価変動による影響を除くためグラフは補正しており統計の数値とは異なる

図7 卸小売業年間商品販売額（補正後）の推移

図8 中心性指数の推移（平成28年）

（出典：商業統計調査、経済センサス（活動調査））

(2) 農業

農業の推移をみると、人口減少や農業従事者の高齢化、後継者不足などの影響により平成12年（2000）から農家数及び耕地面積ともに減少傾向となっています。

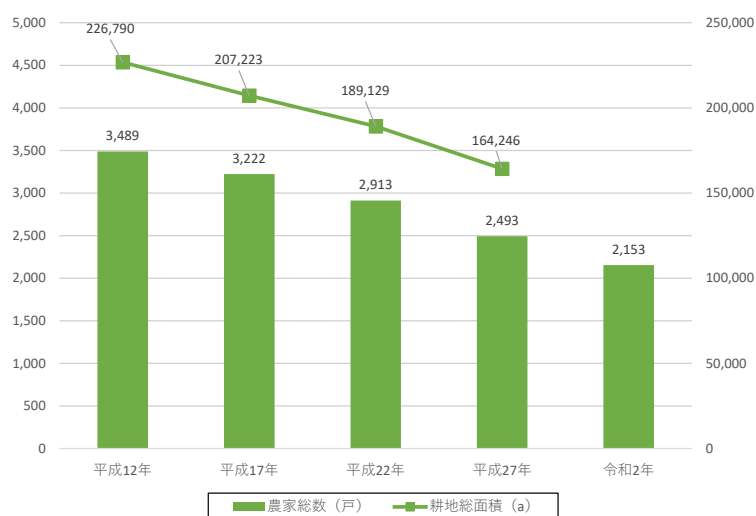


図9 農家数及び耕地面積の推移（出典：農業センサス）

(3) 観光

本市は、湯の花温泉、保津川下り、トロッコ列車などの主要観光施設をはじめ、社寺や名所史跡などが数多く存在し、豊かな歴史・観光資源に恵まれています。

本市への観光入込客数の推移をみると、総数は増加傾向となっており、平成22年（2010）と比較して平成30年（2018）には約214万人から約292万人に増加しています。

一方で、利用形態の内訳をみると、日帰り利用が極端に多くなっており、滞在型観光をいかに推進していくかが今後の課題として挙げられます。また、新型コロナウイルス感染症の影響も懸念されますが、感染対策の成果に合わせて観光需要も回復するものと期待されます。

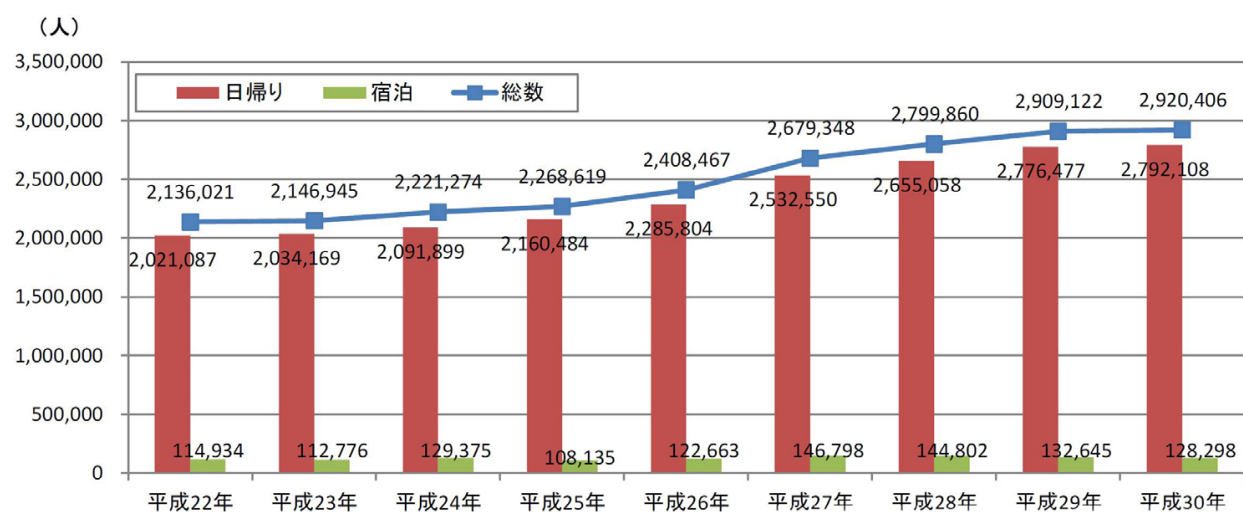


図10 観光入込客数の推移（出典：亀岡市統計書）

4 土地利用

本市は約7割が山林であり、中心部を北から東へと大堰川が流れ、その周辺の平野部では農地が広がるなど、豊かな自然環境を有しています。

市街地では、JR 沿線や平野部南側の山沿いに住宅地が広がっています。また、国道9号沿道やJR 亀岡駅周辺を中心に商業地、京都縦貫道大井 IC 周辺に工業地が広がっています。

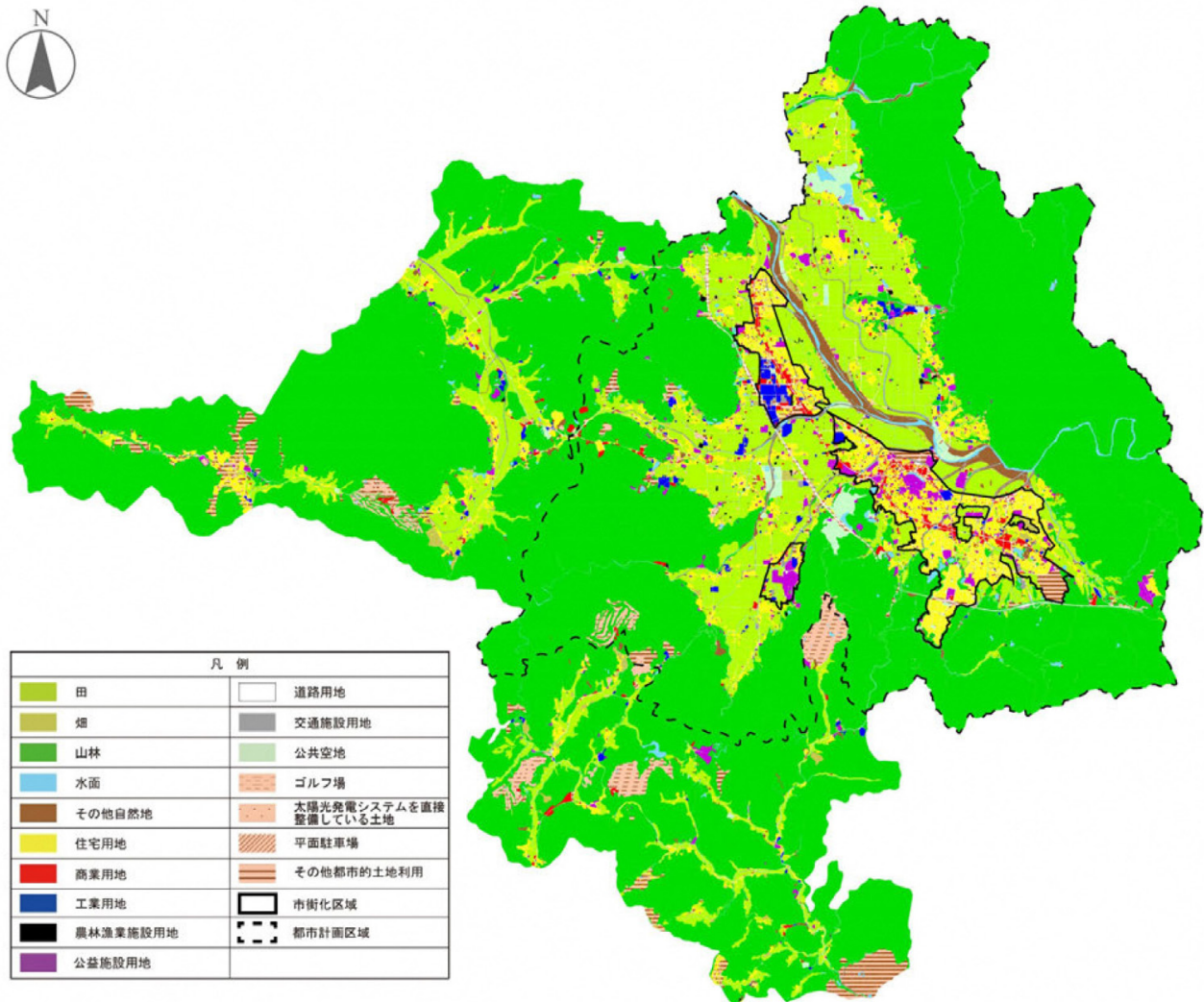


図 1 1 土地利用の状況

5 災害

(1) 土砂災害・水害

本市は周囲を山々に囲まれ、土砂災害が発生しやすい地形となっており、近年は大型化する台風や局地的な豪雨により土砂崩れや土石流、道路の崩落など甚大な被害が発生しています。また、歴史的に本市では市域を貫流する桂川の氾濫によりたびたび洪水被害が発生しており、大堰川の河川改修や上流の日吉ダムの整備により治水安全度の向上が図られています。

発生年月日	備考
平成16年10月20日	がけ崩れ（2箇所）、地すべり（1箇所）
平成22年7月13日	がけ崩れ（17箇所）
平成23年4月30日	がけ崩れ（1箇所）
平成26年8月9日	がけ崩れ（7箇所）
平成30年7月5日	がけ崩れ（2箇所）

表 4 近年の土砂災害発生状況（出典：令和元年度都市計画基礎調査）

発生年月日	原因	浸水面積（ha）	床上浸水（戸）	床下浸水（戸）	浸水田畑（ha）	最大時間雨量（ミリ/h）	総雨量（ミリ）
平成15年7月16日	-	0.338	-	1	...	0.0	0.0
平成16年10月20日	台風23号	173.319	16	85	68.600	37.0	200.0
平成19年6月26日	-	0.072	-	4	0.020	1.0	1.0
平成21年7月19日	豪雨	0.002	-	1	1.730	42.5	90.0
平成22年7月13日	豪雨	0.244	3	23	0.870	21.0	41.5
平成22年8月12日	豪雨	1.495	-	1	...	7.0	15.0
平成24年7月15日	豪雨	...	17	50	...	0.5	0.5
平成25年9月15日	台風18号	...	110	260	321.620	28.5	152.0
平成26年8月9日	台風11号	...	-	42	87.270	18.5	122.5
平成27年7月17日	台風11号	...	-	-	0.420	11.0	135.0
平成28年9月18日	豪雨	...	-	5	...	16.0	64.5
平成30年7月5日	平成30年7月豪雨	...	2	45	0.520	27.0	175.0
平成30年8月23日	台風20号	...	4	47	0.090	19.5	23.5
平成30年9月4日	台風21号	...	1	-	3.410	64.5	83.5
平成30年9月7日	豪雨（秋雨前線）	...	7	36	3.830	8.5	19.0

...：不詳 -：該当なし

表 5 近年の浸水被害発生状況（出典：令和元年度都市計画基礎調査）

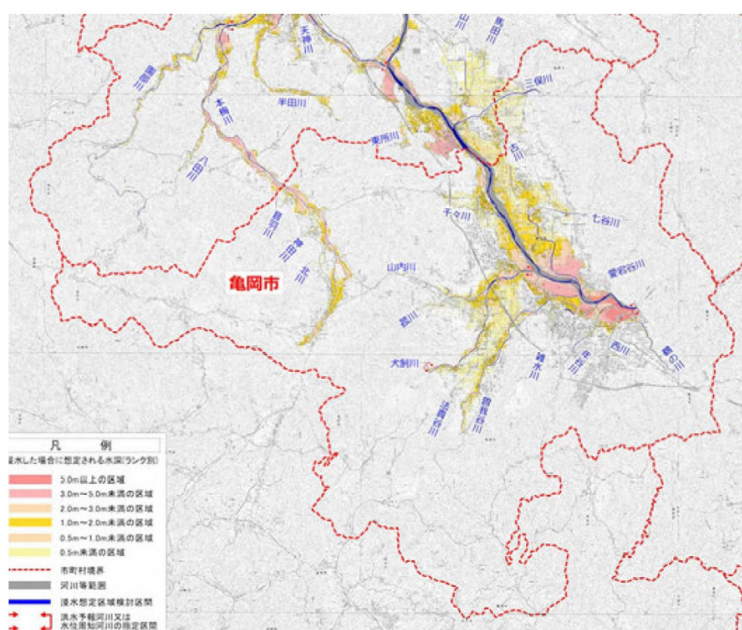
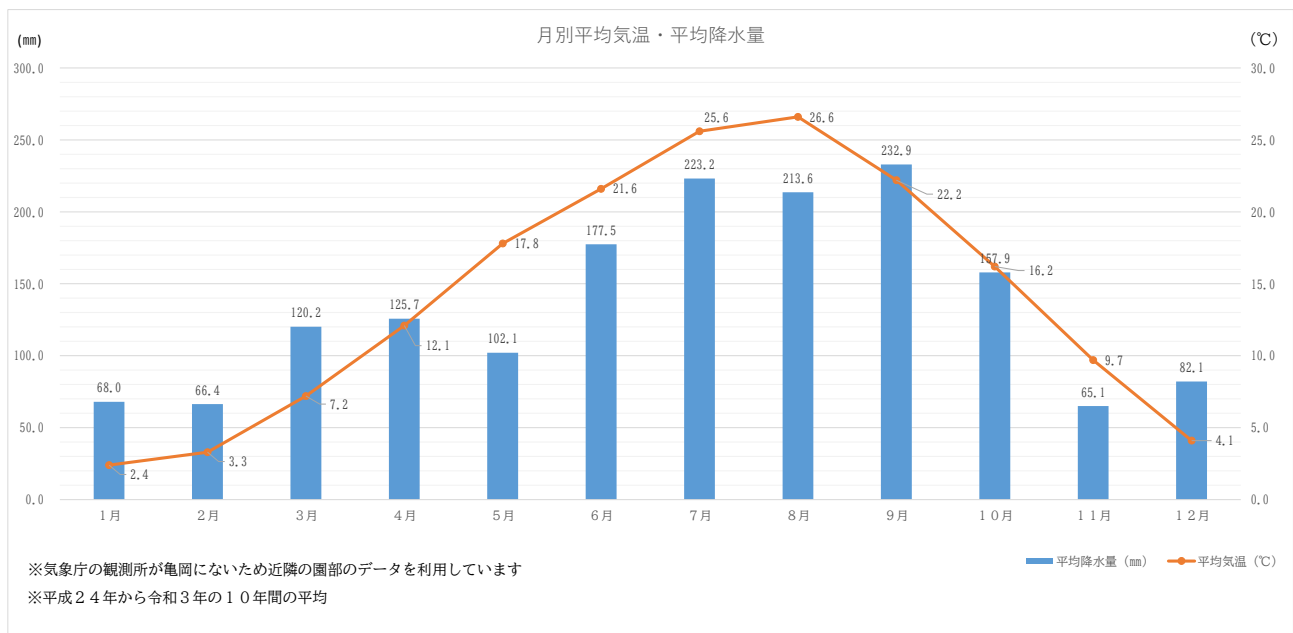


図 1.2 浸水想定区域図（想定最大規模）（出典：京都府砂防課）



(参考) 亀岡市の月別平均気温と平均降水量

(2) 地震

亀岡市の過去10年間での地震の発生件数は62件であり、平成26年度(2014年度)が12件と地震発生回数が一番多い結果となりました。震度3以上の地震については、震度3の地震が6件、震度4以上の地震が3件でした。

亀岡市内には、大きな被害をおよぼすことが予想される活断層が3つ存在します。それぞれ、「殿田一神吉一越畑断層」、「亀岡断層」、「埴生断層」と呼ばれ、いずれの活断層が動いたとしても、市全域に大きな被害をおよぼすことが想定されています。

年度	件数
平成24年度	7
平成25年度	2
平成26年度	12
平成27年度	2
平成28年度	2
平成29年度	4
平成30年度	3
令和元年度	7
令和2年度	3
令和3年度	8
令和4年度(6月1日現在)	12
合計	62

※亀岡市で検知した震度1以上の地震
 (典拠：日本気象協会ホームページ)

第2節 地理的環境

亀岡市域は、兵庫県より連なる丹波山地の東端にあたり、亀岡断層によって南西側の摂丹山地と北東側の若丹山地に分けられます。この亀岡断層の活動によって西側が大きく沈降したことを示す断層崖が保津町～千歳町にかけて確認されます。沈降した西側の地域を、丹波山地を北西から南東に向かって貫流する大堰川が切り開いたことで河岸段丘や沖積地が形成され、亀岡盆地が現出しました。一方、亀岡盆地より西側には、朝日山山地・行者山山地を挟んで本梅盆地が広がりますが、同じく桂川の支流である本梅川の働きによって形成されたものです。

大堰川は、亀岡盆地を貫流して京都盆地に注ぎ、古来より丹波地域と京とを結ぶ主要交通路としても使用されており、道路や鉄道が発達する以前は大堰川を通じた物資の運搬や地域間交流が盛んでした。

陸上交通においても、亀岡市域には京と丹波・丹後を結ぶ幹線道路である山陰道の最初の駅家がおかれまして。現在でも京都市から始まる山陰方面に至る国道9号沿いの最初の都市域となっています。また西の兵庫県丹波篠山市へ抜ける国道372号と南の大阪府豊能町・川西市へ抜ける国道423号の起点となっており、大阪府池田市から京都市右京区へ抜ける国道477号も通るなど近畿地方西部における陸上交通の結節点となっています（国道は、p9の地図を参照）。

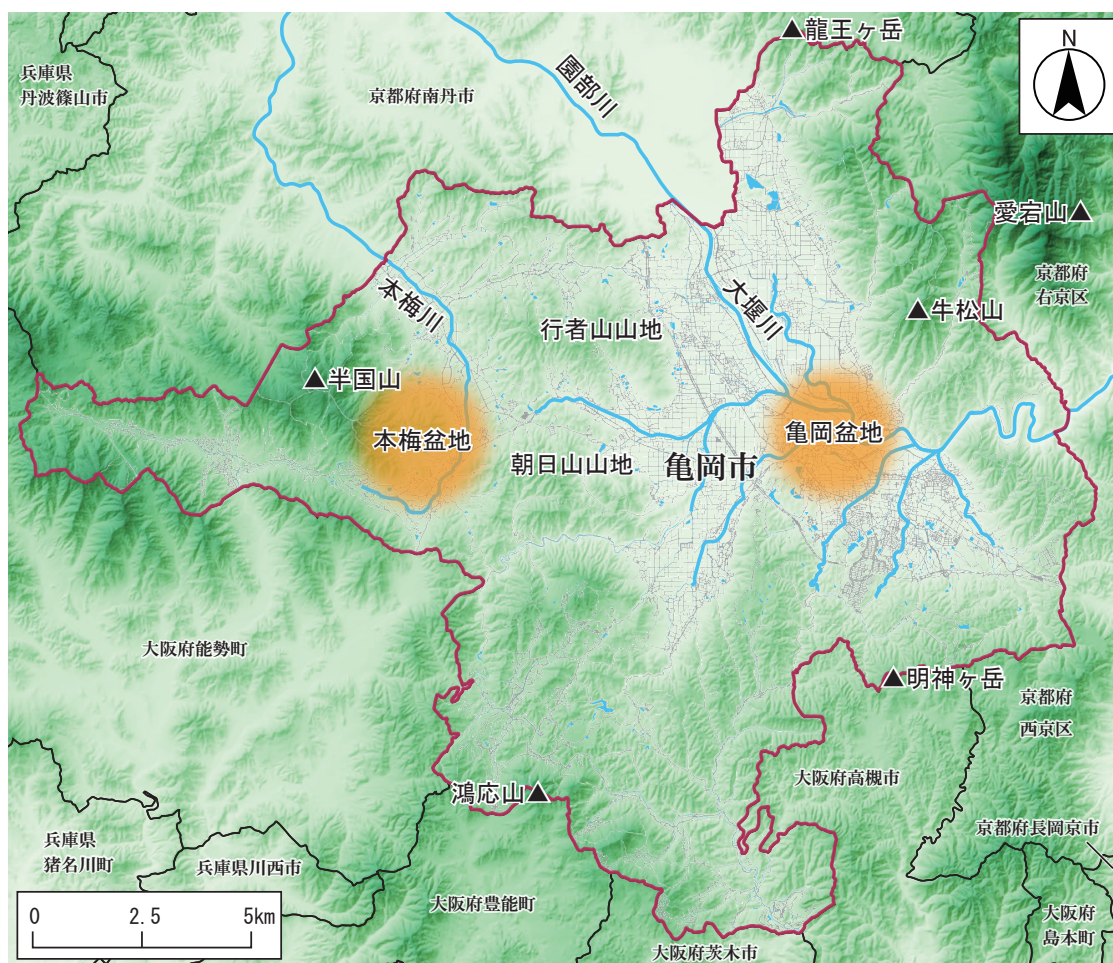


図13 地形図

第3節 歴史的環境

1 明智光秀以前の亀岡

織田信長家臣である明智光秀が築いた丹波亀山城。

現在天守は失われていますが、「本能寺の変」の出発地点であり、戦国期を代表する城郭である丹波亀山城は、亀岡の歴史を語る上で欠かせないものになっています。

明智光秀が「亀山」の地に城郭を築いたのは、亀岡が京都と丹波を結ぶ政治経済の中心地であったことに加え、山陰道・篠山街道・丹後道など主要街道が交差する地であり、保津川の支流にも接続する交通の要衝だったためと考えられます。



▲丹波亀山城天守古写真
(美田村顕教撮影)

以下、光秀に見出されるまでの古代～中世の亀岡の歴史についてみていきます。

※亀岡の地名についてはp 17の図1を参照。

古代

亀岡の歴史は旧石器時代から始まります。

弥生時代には各地で巨大集落跡が確認されており、このころから多くの人々が集住していたといわれます。古墳時代後期には千歳車塚古墳が築かれ、飛鳥時代には蘇我氏や秦氏との関係がうかがえるなど大和政権と結びつくようになります。そして奈良時代には丹波国府や国分寺が置かれ、平安時代に至るまで丹波国の中心地として発展していきます。

(1) 南丹波地域の首長と千歳車塚古墳

まず注目されるのが、千歳車塚古墳（千歳町）の存在です。車塚古墳は、古墳時代後期（約1,500年前）に築造された近畿地方を代表する前方後円墳で、国の史跡に指定されています。

千歳車塚古墳の被葬者については諸説ありますが、武烈天皇と近親の丹波の最高首長だったとの説が有力です。古墳時代後期には亀岡に丹波の最高首長がいて、彼が大和にいる大王の関係者だったのです。中央との結びつきはこのころから強かったといえます。

(2) 群集墳と「石棚」

6世紀後半以降には、「群集墳」といわれる古墳が丘陵部に築かれるようになります。「群集墳」は、直径10メートル前後の小古墳で、埋葬者はムラの長といわれています。この群集墳の数は、確認されているだけでも844基あり、古墳時代の亀岡に多くのムラがあったことを示しています。

注目されるのが、この群集墳のうち拝田古墳群（千代川町）や鹿谷古墳群（蒔田野町）に「石棚」といわれる厚い板石を組み込んだ石室のある古墳が見られることです。「石棚」は、現在の和歌山県域の有力氏族だった紀氏にみられる特徴であり、紀氏の一族が市域に移住してきたことを示すと考えられています。

鹿谷や拝田の山奥にひっそりとたたずむ群集墳の存在は、亀岡市域が古くから畿内近国と結びつきの強い豊かな地域であったことを伝えています。

(3) 「大陸文化」と古代寺院

国道9号を北に向かい、千代川町千原を西に曲がると水田の中にひょっこりと木々が生い茂るお社が北側にみえてきます。この辺りが桑寺廃寺跡です。

桑寺廃寺の造営は、7世紀後半(約1,400年前)といわれており、かの蘇我馬子が奈良に飛鳥寺を建ててから、わずか1世紀後に亀岡市域にも寺院が造られたこととなります。この桑寺廃寺を早い例として、観音芝廃寺(篠町)・與能廃寺(曾我部町)・池尻廃寺(馬路町)、そして最近見つかった佐伯廃寺(禰田野町)など亀岡には次々と寺院が建立されていきます。

前項で亀岡には多くのムラが栄え、その首長の眠る群集墳が丘陵部に多数確認されていることをみましたが、桑寺廃寺は、近隣の拝田十六号墳の造営にも関わった有力な氏族が建立したとの指摘があります。

群集墳にある横穴式石室も大陸文化の流れをくむものですが、群集墳に埋葬されるような有力な氏族が媒体となって、亀岡にも仏教が受容され寺院が建立されるようになったといえます。

(4) 部民制と大和政権

亀岡には、曾我部、余部など「部」の付く地名があります。

平安時代前期(約1,100年前)に成立した『和名類聚抄』という史料の「桑田郡」には宗我部郷、荒部郷などの記載があり、曾我部町の名前の由来がこの宗我部郷である可能性が高いといわれています。

聖徳太子の生きた飛鳥時代に、中央の豪族たちは宮廷の職務に奉仕させることなどを目的として地方の民衆を私的に所有し、組織していました。その組織の単位が「部」とよばれ、「宗我部」とは、有力豪族だった蘇我氏の一族が組織した「部」を意味すると考えられます。

部民制は飛鳥時代後期には廃止されましたが、その痕跡は地名として残存することとなりました。曾我部町の地名は、亀岡と蘇我氏との結び付きを今に伝えています。

(5) 丹波国府の設置

古墳時代～飛鳥時代にかけて亀岡は中央との関わりの深い重要な地域でしたが、こうした歴史的背景のもと、ついに奈良時代に丹波国衙が建設されます。

国衙は、律令制のもとで五畿七道の各国に置かれた政治の中心地であり、現在でいう都道府県庁にあたります。現在でも県庁所在地が地域の中心地として栄えるように、この国衙が造られたことによって、周辺には大規模な工房がつくられ、国分寺や国分尼寺も創建され、さらにはこれに伴う瓦窯が築かれるなど、亀岡は丹波国における政治や文化の一大中心地(国府)となりました。

ただし、この国府の場所は未だわかっておらず、地名などを根拠とする千代川説、大規模な建物跡遺構を根拠とする池尻説、平安末期の絵図を根拠とする屋賀説など複数の説が乱立しています。

その点で興味深いのは、丹波国司であった藤原為頼が国府で詠んだという和歌です。「ほつかわに まがふ汀の あやめ草 月まつよひは みじかからなむ」。為頼は、保津川に映る月をどこからながめていたのでしょうか。

(6) 丹波国分寺と仏教文化

丹波国府が置かれたことにより、亀岡盆地はその後の平安・鎌倉～室町時代にいたるまで丹波国の政治の中心となります。

また聖武天皇の詔をうけて8世紀半ばに国分寺・国分尼寺が川東地域に建設されたことも重要です。国分寺等の整備を通じて、中央の仏教文化の影響が当地にも及び、丹波国における仏教信仰の拠点のひとつとなっていたと考えられるからです。

亀岡ゆかりの像として、金輪寺（宮前町）旧蔵と伝え現在は高山寺（京都市）等に分蔵される薬師三尊像をはじめ、無量寺（曾我部町）の菩薩立像、極楽寺（千歳町）の十一面観音立像など、古代に遡る本格的な作域の像が伝えられています。また甘露寺（東別院町）の十一面観音坐像や極楽寺（西別院町）の薬師如来立像などの存在から、11世紀初頭頃までには山間部を含めた市内各所に寺院が営まれるようになったとみられます。

(7) 平安京と亀岡

8世紀後半になって京都に都が置かれると、天皇や公家、大寺社（いわゆる権門）が全国的に影響を持ち、自らの支配領域を広範に設定するようになります。

亀岡においても別院荘、野口荘、賀舎荘、八田荘など皇族や大寺社を領主とする多くの荘園が置かれました。余部町に残る「政所」の地名や、近年曾我部町の犬飼遺跡で発掘された方形居館跡などは、荘園の政務を司る政所が置かれたことを示しています。

こうした荘園の存在は、おのずと中央と亀岡の人的・物的交流を促進させ、豊かな文化を育む土壌になったといえます。

(8) 穴太寺観音縁起と都鄙間交流

『今昔物語集』は、平安時代末の成立とされる説話集ですが、ここに穴太寺（曾我部町）の観音像に関する説話が収められています。

「丹波国桑田郡の郡司が、長年の宿願を叶えようと京の仏師に観音像の制作を依頼した。仏師は短期間できわめて美しい観音立像を作ったため、感心した郡司は自らの愛馬を仏師に与えたが、すぐに馬が惜しくなり、家来を派遣して篠村の辺でこの仏師を射殺し、馬を取り返した。しかしその後数日経っても仏師の行方の尋ねがないことを怪しんだ郡司は、家来を派遣して様子をうかがうと、この仏師は元気で与えた馬も存在していた。奇妙に思った郡司と家来が観音立像を見に行くと、矢が刺さり、血が流れていた。郡司と家来は声をあげて泣いてやがて出家した」という話です。

こういった話が語られる背景には、郡司など地域の有力者が都の仏師を招聘して仏像を造らせる、といった状況があったことが考えられます。

中世

中世前期、亀岡は朝廷や公家、寺社の影響下に置かれました。この頃に立荘された賀舎荘、野口荘、別院荘などの領域型荘園は、多くが王家や公家・寺社を領主としていました。また中央の僧や仏師らが多く丹波を行き来し、すぐれた文化を興しました。室町幕府が京都に置かれてからは足利政権の影響力が強まり、禅宗寺院が勢力を拡大しました。室町中期以降、丹波国守護は管領細川京兆家が世襲し、戦国期まで力を持ち続けました。

(9) 鎌倉期の文化

亀岡には鎌倉期の優れた彫刻や絵画が多く伝来しており、この時代に京都との人的交流が活発であったことがうかがえます。

この時期で特に注目すべきは、宮前町に位置する神尾山金輪寺^{かんのおさん}を再興した高信^{こうしん}の存在です。

高信は、明恵上人^{みょうえ}の高弟の一人で、13世紀前半に梶尾の高山寺で活動し、寛喜年間（1229～1235）頃から神尾山で活動を開始したと考えられています。高信の活動は神尾山を中心に弘長3年（1263）頃まで続きますが、晩年は病臥しがちになり、高信にかわって順高を中心とする弟子たちが神尾山において談義、編集、書写等の活動を継続したといわれます。

このように金輪寺は鎌倉期から15世紀頃まで高山寺と関係が深く、高山寺旧蔵の薬師如来坐像（重要文化財・京都国立博物館寄託）、日光菩薩坐像（重要文化財・東京国立博物館蔵）、月光菩薩坐像（東京芸術大学蔵）の三尊は、もともと金輪寺に安置されていたものだと伝えています。

現在金輪寺本堂に安置される金剛力士像のうち吽形像は、正安3年（1301）に定有によって造られた旨の銘があり、まさに金輪寺が高山寺と関わりが深かった時期の像です。

また、旧亀山城下の西堅町^{そうけんじ}に所在する宗堅寺には、永仁6年（1298）の造像銘を有する如意輪観音像が安置されています。両脚部の像底には「大仏師安阿流法橋賢清」の墨書銘があり、安阿弥^{かいけい}すなわち快慶の末流を自称する中央の仏師によって制作されたことが知られます。

(10) 室町幕府と禅宗寺院

京都の隣接地として、豊かな文化が栄えた亀岡の地を武家権力も重視しました。

鎌倉幕府打倒のため足利尊氏が篠村八幡宮（篠町）で武士を集め蜂起したことは有名ですが、足利尊氏の母は丹波国の上杉氏出身であり、丹波国は足利氏にとってゆかりのある地域だったといえます。

室町幕府が京都に置かれると、山陰道の入口に位置する丹波国は重視され、山名氏・細川氏など幕府の重臣が丹波国の守護として任じられました。

細川氏が丹波国の守護となって以後は、京都に近い亀岡は細川氏や一族によって保護され、同氏が教線拡大の支援者となっていた臨済宗妙心寺派が勢力を拡大しました。

蒔田野町太田に位置する龍潭寺^{りょうたんじ}は、妙心寺を再興した雪江宗深^{せつこうそうしん}の弟子である特芳禅傑^{とくほうぜんけつ}が細川典厩^{てん}家の支援を受けて再興した寺院であり、現在、京都市の龍安寺^{りょうあんじ}、南丹市八木町の龍興寺^{りょうこうじ}と並んで「三龍寺」と称されています。

(11) 山城と戦国時代

平安期以降、丹波国ではいわゆる「山の寺」が多く築られました。

亀岡でも先述した金輪寺（宮前町）、楽音寺（東本梅町^{がくおんじ}）、千手寺（蒔田野町^{せんじゅじ}）、瑞巖寺（蒔田野町^{ずいがんじ} ※現在は麓へ移転）、苔寺千軒寺（本梅町^{こけでらせんげんじ} ※現在は石垣のみ残存）など丘陵部の頂に位置する寺院が数多くありました。

戦国時代の武家権力は、「山の寺」の有する中心地性や聖地性を利用するため「山の寺」を城郭とすることも少なくなく、金輪寺後背地の神尾山城、千軒寺後背地の数掛山城^{かずかけやまじょう}などは「山の寺」を利用した山城です。同様に、出雲神社（千歳町）の御神体山に築かれた御影山城^{みかげやま}もその聖地性を利用した城郭といえます。

このほか、笑路城（西別院町）、法貴山城（曾我部町）、神前北山城（八木城、宮前町／南丹市八木町）など亀岡には多くの山城がありますが、これらは交通の要衝を扼する目的で築かれたものと考えられます。

亀岡に数多く所在する山城は、亀岡の地に多くの「山の寺」があり、かつ山陰道や摂丹街道などの街道が交差する交通の要衝だったことを示しています。

（12）明智光秀と丹波亀山城

織田信長家臣の明智光秀は、足利義昭に仕えていたこともあり、室町幕府と関わりの深い丹波国の攻略担当として織田信長から命じられましたが、交通の要衝という点から、光秀も亀岡を極めて重視していました。

本能寺の変のとき、光秀がこの亀山城から出陣したことは有名ですが、光秀は、丹波国を攻めるとき必ずこの亀山に陣を取っていました。また、波多野秀治の立て籠もる八上城を攻める際には、娘婿である明智弥平次（秀満）を亀山城に置いて留守を任せ、八上城落城の際には、波多野兄弟を一度亀山城に止め置きました。

光秀は、天正年間には戦争に明け暮れており、丹波進攻中も、越前国へ一向一揆攻めに向かったり、謀反を起こした松永久秀や荒木村重を討ちに大和国や摂津国へ行ったり、本願寺との戦で大坂に出たりと、畿内近国を駆け回っていました。そんな光秀にとって、山陰道や丹後道、篠山街道、摂丹街道が交わる亀山の地は、軍事行動のハブとなる重要な場所であったと考えられます。

また、大堰川の水路が近いというのも重要なポイントでした。亀山城は、段丘崖に位置しますが、雑水川等の大堰川支流との接続に便利な場所にあります。光秀の築城した坂本城や宮津城をみても水路との接続を意識した立地になっているほか、光秀自身、家臣に対し「河原尻村の木材を保津川端（おそらく宇津根）まで運ぶように」と指示しており、大堰川水運を利用していたことがうかがえます。光秀は上流からの材木を引き上げて陸路と接続するための好適地として亀山を選び、この地に城を築いたと考えられます。

2 明智光秀後の亀岡

明智光秀が山崎合戦で誅殺されると、亀山城はすぐに羽柴（豊臣）秀吉によって接收されます。豊臣家滅亡後は、徳川政権にも重要視されて、譜代大名が代々藩主に任じられる地となります。亀岡は、光秀の築いた土台をもとに丹波亀山藩領として発展していきます。

また、亀岡の各地に旗本領なども設置されてそれぞれの地域で独自の文化が発展していきます。この項では、光秀以後も発展し続けた近世～近代の亀岡の歴史についてみていきます。

※亀岡の地名についてはp 17の図1を参照。

近世

江戸時代、慶長14年（1609）に岡部長盛が丹波亀山城に入り、丹波亀山藩の初代藩主となります。丹波亀山藩は山陰街道の要として、代々譜代大名が封じられました。岡部氏の後は、大給松平氏・菅沼氏・藤井松平氏・久世氏・井上氏・青山氏、形原松平氏が藩主をつとめ、寛延元年（1748）に入封した形原松平氏は廃藩に至るまで藩主として領内の町や教育の整備につとめました。亀岡の東部・西部では、旗本による支配が進められ、各地域で独自の文化が発達しました。

(1) 大堰川水運と角倉家

光秀も注目した大堰川水運の歴史は古く、1,200年前に遡ります。

当初は丸太を組み合わせた筏が中心で、数日かけて運ばれた木材が、建築資材となり、平安京造営を支えたといわれています。

江戸時代には、川大名と呼ばれた京都の豪商・角倉了以^{すみのくさりょうい}が、息子の素庵^{そあん}とともに保津溪谷の開削に着手しました。急峻な溪谷の工事は困難を極めましたが、約6カ月の工事を経て、船の通ることのできる水路が開かれました。これにより米、麦、薪、炭などの特産品の大量運搬が可能となり、大堰川は丹波と京都を結ぶ動脈として発展しました。

時代の変遷とともに輸送方法が陸路へと移った後は、水運は観光船として活用されることとなりました。

(2) 丹波亀山藩と江戸時代

一般に、戦争を重視した戦国期の城郭は江戸時代になると破却され、別の城郭や陣屋が築かれることが多いのですが、明智光秀の築いた丹波亀山城は、山崎合戦で光秀が誅殺されて以後も、豊臣政権、徳川政権によって活用され続けました。それほどに亀山城の立地は良く、近世の権力もここを利用せざるを得なかったといえます。

江戸時代、譜代大名の岡部長盛が丹波亀山藩の初代藩主となります。丹波亀山城は、慶長15年(1610)の大坂冬の陣に合わせて、大坂城を取り囲む目的で「天下普請」により五重の層塔型天守を有する近世城郭として整備されました。このときの天守台石垣は一部残存し、石垣の石切り場(蔭田野町太田など)も現存しています。

正保年間に作成された「正保城絵図」の丹波亀山城には、五重の天守に加え、内堀・外堀・惣堀の三重の堀と土塁、南北に整然と通った街道、屋敷地などが描かれており、17世紀前半までに亀山城下町の原型はできあがっていたと考えられます。

(3) 形原松平氏と教育

歴代の丹波亀山藩主のなかで城下町や祭礼・教育制度の整備にもっとも注力したのは形原松平氏でした。

亀岡祭は、室町時代に鍬山神社(上矢田町)で行われた祭礼が起源とされますが、現在のように山鉦の巡行する形に整備されたのは形原松平氏の時代と言われています。

また、藩の教育施設である邁訓堂^{まいくんどう}が整備されたのも形原松平氏の時代で、現在の亀岡小学校には『邁訓堂』の扁額が残されています。

藩校教育は近代にも受け継がれ、亀岡町には邁訓小学校が誕生する一方、旧亀山藩士である笠原靖之^{しゅうせいこう}が小川村集成校(千代川町)で句読や筆道を教えるなど、明治5年(1872)の学制をうけて林立した小学校では、旧来の藩士や漢学者らが教員となりました。

(4) 亀岡の文化人

江戸時代以降、亀岡では多くの文化人が輩出されました。

江戸期には、近世絵画史を代表する円山応挙（穴太村出身・曾我部町）やその門弟である岡村鳳水（亀山出身）、心学を説き「石門心学」の礎を築いた石田梅岩（東掛村出身・東別院町）、近代医学の祖ともいわれる山脇東洋（亀山出身）などが代表的な人物です。

彼ら文化人が生まれた背景には、古代から近代にいたる亀岡における豊かな文化の発展があると考えられます。

(5) 亀岡各地の祭礼

佐伯灯籠は、毎年8月14日、稗田野神社、御霊神社、若宮神社、河阿神社の四社合同で行われ、五穀豊穡を祈願し、祖先を祀る祭礼です。

古くから灯籠祭りとして広く知られ、神輿に加えて神（役）灯籠と台灯籠が町内を巡行します。神灯籠には、人形で稲作の過程が表現され、台灯籠には人形浄瑠璃の舞台としての役割があります。

また、佐伯灯籠において欠かせない「人形浄瑠璃」は、背丈35cmほどの一人遣いの小さな串人形を操る全国的にも珍しいものです。佐伯灯籠保存会の皆さんによって、巡行の道中や佐伯灯籠資料館などで上演されます。

大井神社の立花行事（大井町）、犬甘野の御田（西別院町）、保津の火祭り（保津町）など地域色豊かな祭礼・行事が現在まで続けられています。

近代

明治12年（1879）、亀岡は南桑田郡役所の所在地となり、明治22年（1889）に亀岡町が発足しました。南丹波の政治・経済・文化諸方面の近代化を一貫してリードしたのが亀岡です。鉄道・道路といった交通の充実にとともに、保津川下りや湯の花温泉など、大都市近郊ならではの観光事業も生み出されていきます。

(6) 山陰道鎮撫隊と亀岡

幕末の亀山藩は、元治元年（1864）に禁門の変が起きると京都の警備に出兵するなど、江戸幕府側の佐幕派の立場にありました。

大政奉還の後、幕府軍と新政府軍の対立が激化し、いわゆる戊辰戦争が勃発すると、西園寺公望は山陰道鎮撫総督に任ぜられ、慶応4年（1868）の正月5日には丹波へ入り、馬路に陣所を構えました。

佐幕派であった亀山藩は、結局帰順の誓書を提出し、これに続いて山陰道沿いの諸藩（園部藩・篠山藩・柏原藩・福知山藩等）も相次いで降伏していきました。

山陰道鎮撫隊には、亀岡の村々からも多くの郷士が「弓箭組」を結成し、参加しました。

(7) 実業家の輩出と階級意識の目覚め

田中源太郎（北町出身）は、京都府下最大の地主として、多数の会社や銀行を京都市内で経営し、政界・財界において大きな力を持ちました。明治32年（1899）に京都一園部間に鉄道が開通し亀岡駅が誕生したのも、田中の手腕が発揮されてのことです。矢田家・垂水家といった親戚筋も、

亀岡町政を担い、地元を基盤に起業や投資をおこないました。田中自らが改築した生家・楽々荘^{らくらくそう}は、洋館や庭園に意匠を凝らし、今日なお親しまれています。

一方、京阪神に近い亀岡には、大正デモクラシー期の都市社会運動やその背景となる思想が早々に伝わりました。わが国最初の小作人団体の連合組織とされる丹波小作人同盟会も誕生し、活発な活動を繰り広げました。

(8) あらたな教育・宗教

私塾の隆盛から小学校の設置と定着を経て、亀岡では、地元の需要に応えた中等教育が進展しました。明治37年(1904)年には郡立高等女学校、大正9年(1920)には郡立実業学校(農学校)が発足し、両校ともやがて府立化されて、さらに拡張します。戦後は、新制の共学亀岡高等学校へと統合され、現在も亀山城跡に校舎が構えられています。

高等教育への関心も強く、中川小十郎^{なかがわ こじゅうろう}(馬路村出身・馬路町)は、西園寺公望に仕え、京都帝国大学創設に尽力したのち、私学・立命館^{おおもときょう}を興しました。

宗教方面においては、綾部^{おおもときょう}の大本教(開祖:出口なお)が大正11年(1922)に亀岡でも開山し、戦前期には何度かの弾圧を経験したことでも知られています。

(9) 近代戦争と亀岡

明治期以降、帝国主義国家との覇権争いの中で、日本も多くの戦争を経験することになります。

亀岡市内の神社には、日清戦争や日露戦争の勝利をたたえる奉納額や戦利品が納められています。戦利品などはさらなる戦争の勝利を祈願し、人々の戦意を高揚する役割を果たしました。

太平洋戦争下の昭和19年(1944)に、満19歳の男子でも徴兵検査を受けることとなり、多くの若者が召集され、出征していきました。その際に送られた日の丸寄せ書きが市内に多く伝わっているほか、千歳町自治会には戦場から送られた軍事郵便が残されており、当時の戦況がうかがえます。

3 現代の亀岡市と市域の変遷

亀岡市は、昭和30年（1955）1月1日に市制が施行され、南桑田郡内の1町15村が合併しました。翌年には船井郡東本梅村が、同34年（1959）には篠村が合併しました。

合併後も東別院町以下の各自治会が近代村の領域をそのまま踏襲しているため、地形的な要素も影響して自治会それぞれに独自の歴史と文化が育まれており、次表のとおり『新修 亀岡市史』とは別にいくつかの自治会では「町史」等が作成されています。

亀岡市では、このような各自治会・地域の特色をふまえて文化財の保存・活用を進めます。

表6 亀岡市の成り立ち

概要	1955年	1956年	1958年	1959年		現在の自治会	各町の町史
	1町15村が合併	船井郡東本梅村が合併	東本梅町のうち若林・南大谷が現在の南丹市園部町に合併、西別院町の牧・寺田地区が現在の大阪府豊能町に合併	篠村が合併	つつじが丘が開発・分譲される		
亀岡町						旧亀岡地区	『東堅町史』『ふるさと古世』
東別院村						東別院町	『ふるさと東別院歴史』
西別院村						西別院町	
曾我部村						曾我部町	『寺村の春秋』
吉川村						吉川町	
穂田野村						穂田野町	
本梅村						本梅町	
畑野村						畑野町	
宮前村						宮前町	『古里神前』
東本梅村						東本梅町	
大井村						大井町	
千代川村						千代川町	『北ノ庄の歴史』
馬路村						馬路町	『我がまち馬路ーふるさとの歴史をめぐるー』
旭村						旭町	『旭町20世紀のあゆみ』
千歳村						千歳町	『ふるさと千歳』
河原林村						河原林町	『河原林の歴史』
保津村						保津町	『ふるさと保津』
篠村						篠町	『篠村史』
旧亀岡町の一部と篠町の一部						東・西・南つつじが丘	



(再掲) 図 1 亀岡市の地域呼称

【主要参考文献】

亀岡市史編さん委員会 『新修 亀岡市史』 本文編第1巻・第2巻

亀岡市文化資料館 『第59回企画展 戦後70年、あのとこの亀岡』 2016年

亀岡市文化資料館 『第63回企画展 山陰道鎮撫隊—丹波の郷土と幕末維新一』 2018年

亀岡市文化資料館 『第34回特別展 明智光秀と戦国丹波—丹波進攻前夜—』 2020年

亀岡市文化資料館 『第35回特別展 丹波決戦と本能寺の変』 2020年

亀岡市文化資料館 『第37回特別展 亀岡の名宝』 2022年

松岡久美子「亀岡市域の仏教美術」(亀岡市文化資料館『第37回特別展 亀岡の名宝』2022年)